令和　6年度　　園評価書

園番号　24　園名　静岡市立東豊田こども園

Ⅰ　経営の重点に関わること

評価段階（A：よくできている　B：概ねできている、C：あまりできていない、D：できていない）

1　教育・保育目標	2　重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
「心豊かに表現する子」	「心が動く・体が動く・地域と動く」	子どもと一緒に同じ遊びをする中で子どもの行動に「なぜ？」「どうして？」と考え、語り合いをしている	子どもと一緒に遊びその場の姿をとらえ、「なぜ？」「どうして？」と探り、遊びを進めてきた。子どもと話をしながら思いも探ってきた。子どもと会話を重ねて応答的なかかわりを意識してきたが、保育者が答えを出してしまったり、手伝ってしまったりと先走ってしまうこともある。	B	B	・丁寧にかかわり、園児の育ちを支えている。 ・学校でもコロナ禍の緊急事態宣言の間、「家庭学習で何をしていいかわからない」という児童が多かったことを思い出した。その実態から、自律的な子を育てようという動きになっている。児童が学びを調整していこうとする姿（自分で学習内容を決める、自分で時間を決めて取り組む、自分で取り組む順番を決めるなど）は、園児が遊びに向かう姿と同じと感じる。 ・保護者も「『やってあげる』ことが子どものため」ではなく、「『待つ』ことで、子どもが『自分でやり遂げる』という自律に向かう」意識が、必要になるのではないかと感じる。	・大人が答えを出すのではなく、子ども達で意思決定をしたり、どうしていくことが良いのか考えるなど、子どもが遊びや生活を自ら創り出すために、保育者はどんな言葉を子どもの世界に返していくと良いのかを意識し、子どもとかかわっていく。
		遊びに必要なものを子どもと一緒に考えもっと面白くするための環境を工夫している	子どもと話をしたり「～したい」思いを受け止めたりして、子どもと一緒に考えて環境を整えるため、子どもの実態や経験を踏まえて対応する必要を感じた。保育者が先走って環境を用意したり与えたりするばかりではなく、「待つ」「見守る」という支援も必要であると考える。	B	B		
		今日の遊びを子どもと一緒に話しながら、明日の遊びにつながる振り返りを工夫している	活動の切り替えや片付け中などに個々と振り返りをしたり、帰りの会で、クラス一人一人と今日の楽しかったことや上手くいかなかったことを共有し、友達の遊びの様子を知ったり、翌日の期待を高めていけたりするように振り返りの工夫をしている。保育者は、子どもの言葉の奥の思いをどのように次の日の活動につなげていくか日々、試行錯誤している。	B	B		

Ⅱ　各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	就学までに経験させたいことを意識し、０歳児からの連続性を持った教育・保育を行っている	季節の製作では学年ごと経験させたいこと（指先を使う技や技術的なことや扱う素材など）を３学年で話し合うなどして、育ちの連続性を意識している。自園が自主的に行っている「協同的な遊びの研修会」では就学までの育ちを学び、保育に活かすことができた。	A	A	・行事の準備を丁寧にしてくださっていることがよく伝わってくる。	・子どもの育ちの連続性を意識した無理のない活動を進めていくために、各学年の発達段階をおさえていくことが必要。「保育改善支援資料」の「教材の記録」のページを利用し、「製作」と「歌・手遊び」の表を埋めながら、見通しを持つようにする。
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の育ちや生活状況、家庭環境を考慮し、園児が安心して過ごせるようなかかわりや援助を行っている	子どもの不安が軽減するよう、保護者に寄り添う心持ちを大切に対応している。家庭環境や家庭での生活リズムも職員間で共有し、援助の仕方を話し合い対応している。	A	A		・引き続き保護者に寄り添い、家庭環境や家庭での生活リズムを把握するとともに職員で共有し、援助していく。
	(3)環境を通して行う教育及び保育	遊びの興味関心が広がり、子どもが主体的に遊びをすすめる環境が整えられている	毎週金曜日の「すくすく会議」で、園庭の遊びの環境を考えている。子ども達は、保育者が遊びの継続を意識し整えた環境の中では遊ぶが、環境をあえて用意していない日は、自分から遊びださない姿が見られる。「主体的に遊びをすすめる姿」を願って環境を整えてきたが、整えすぎていたり、子どもの思いとのズレがあったのではないかと考える。	B	B		・「子どもの思いに寄り添う」ということの本質に近づくよう、子どもの言葉や保育者への要求を、子どもの世界に返していく。子どもが「自分で」動き出せるような支援を行い、主体性を育てる。
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	避難訓練、不審者訓練が積み重ねられ、子どもが安全に避難するための取るべき行動を理解し、子どもの命が守られている	減災教育の研修を園内で共有し地震時の避難の仕方を見直した。回数を重ねることで職員、子ども達の意識に変化が見られ、「顔を上げて周りを見る」「備え付けの動かないものにつかまる」などの行動につながり始めている。訓練の計画の見直しを図り、予告なしでの地震、火災、不審者訓練などでも職員が判断し子どもの安全を守る訓練を積みたい。	B	B	・減災教育については、保護者にも情報が届くよう、保護者会も一緒に学んでいく機会を園と調整したい。	・減災教育が園の職員で共通の認識がもてるように、講師を保護者会と協力して招き、園児、保育者、保護者の三者で直接学んでいく。
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	栽培活動、食育活動で育てたものを収穫し食べることに感謝し自分の体の栄養となっていることを伝えている	自園に給食室の無い園だからこそ、栽培活動やクッキングなどで食べ物への興味・関心や食べることの大切さを伝えていきたいと考え、活動の中に取り入れてきた。クッキング以外でも「食育」と「健康な体づくり」を結びつけて幼児期に子どもに伝えていきたい内容を計画に載せて実践していきたい。	B	B		・年間の食育計画を実施し、健康な身体と食事がつながっていることをわかりやすく伝えていく。また、園庭で収穫できる果実や栽培活動で育てる野菜を活用して、季節を感じる食育活動を行う。
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	専門の講師による園内での研修で得た学びを具体的な支援につなげ園内で共通の支援が出来ている	専門の講師を招き、すぐに活かせる支援方法を教えてもらい実践することができた。その子にあった支援をすることで、保育者も子どもも安心して毎日の生活を送るようになっている。一方で、ケース会議や支援が必要な子ども達の遊びの会の実施が少なかった。特性の把握や支援の仕方を共有するために継続してできるようにしていきたい。	B	B		・公開保育2日目に支援が必要な子が同じクラス内でどんな姿なのか、活動にどのように入っているのかなど、見合う日を作り、支援の方法、タイミングなどについて話す機会を作る。
5 組織運営	(1)組織体制の充実	各職員が自分の分掌の役割を理解し、リーダーを中心に準備や取り組みが協力して進められている	職員数が少ない中、様々な行事を分担するため、仕事量に偏りが出てしまうことがある。準備が明確になると協力する体制はできているため、一人に負担がかからないよう分掌を見直し、「リーダーは全体を把握し指示を出す」「各々取り組むべきことを自身で把握し率先して動く」という体制を整えたい。	B	B	・職員が少ない中、力を合わせて園運営をしている様子がある。一人一人の負担が多いため大変であることが予想される。「ヘルプ」を出せる人ばかりではないと思われるため、のりしろをもって取り組む体制が必要になると思われる。	・分掌の割り振りを見直すと共に、複数配置にして相談したり協力したりしながら、行事を進めていく体制を整える。分掌がどのように動いて進んでいるかをタブレットで確認していく。（園内連絡を活用する）
6 研　修	(1)研修体制の充実	研修テーマに沿った視点で公開保育を行い、話し合いの場で活発な意見が出ている	公開保育後の事後研修会では、研修主任を中心に意見が出やすい体制作りに取り組んだことで、活発な意見交換ができるようになっている。若手職員も積極的に発言し、テーマについての話し合い、学んだことの共有ができている。	A	A	・円座になって話をすると、意見が出やすい。雰囲気づくりに取り組み、研修の活性化が図られたことは素晴らしい。	・今年度の雰囲気や活発な意見交換の様子が引き継がれるよう、座り方や机の設定の仕方を続けたい。 ・付箋を利用しながらも、付箋の奥にある一人一人の職員の思いを引き出せる話し合いを進めていく。
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	日々の点検を確実に行い子どもが安全に過ごせる場が整備され、必要に応じて修繕が進められている	安全点検の実施、日々の小さな気付きの報告が徹底されている。報告が上がった時には即時対応、修繕に取り組めている。用務の仕事に長けている保育補助員が加わり、細かな清掃や樹木の剪定なども進められている。	A	A	・アプリを使っての情報伝達は、先生方の負担軽減につながっている。若いお母さんたちには、身近なものとなっていると思うが、紙の方が見やすく、手元に置いておきたい方もいる。 ・小学校の職員の園訪問は、行きたい気持ちがあっても授業や人員配置の関係で大変難しい。夏休みなどが比較的に動けるので、見る機会があると実現しやすい。 ・ユネスコスクールのカリキュラムをマネジメントし、園独自の取り組みにつながるとさらに良い。 ・さわやかサロンでの高齢者とのかかわりは、参加者のみなさんがとても喜んだと聞いている。継続して交流できるよう、つなげていきたい。	・毎日の安全点検や週末、月末の点検で、安全な保育環境であることを確認する。また、危険個所や修繕が必要な個所の報告を継続して行い、スピードをもって修繕を進める。
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	参加会、個人面談を通して保護者と子育てを語り合う機会を作り、保護者の声を丁寧に聞き取っている。子育ての楽しさを感じられるように園の様子を発信している	保護者との語り合う場を年３回も受けた。今年度はパワーポイントを利用し、子どもの発達の特性や遊びの変化、友達とのかかわる様子などを、説明に加えて写真を提示した。具体的な姿を伝えることができ、園の教育保育について発信できた。	A	A		・引き続き子どもの姿や保育の在り方、お願いお知らせなどをアプリを利用して発信していくとともに、紙媒体での配布が可能であることも広く伝えていく。保育懇談会や面談など、２号認定児の保護者の方が、無理なく参加できるような日程を提案していく。
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	「東豊力」を意識した教育・保育活動を展開し、幼小中学校との交流が行われている	小学校へ訪問する機会が増え、どの学年も学校に触れ合うことができた。小学生との触れ合いの後は、子ども達の表情やつぶやきから多く喜びや気付き学びがあったことがうかがえた。正規職員が、１年生への読み聞かせに行ったり、公開授業の参観へ全員が参加したりし、学校教育を意識する機会を得た。交流がいつでもできるような関係作りを進めていきたい。	B	A		・小学校への訪問は引き続き行い、年長児のみならず年中児年少児も小学校へ親しみがもてるようにしていきたい。小学校の先生方にも園へ足を運んでもらえるよう、長期休業中の交流計画を考えていく。
１０ 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	子どもが地域の良さを感じ、地域資源・自然・人材を活かした行事や活動が行われている。	「たけのこを掘って持ち帰る」「さつまいもを焼いてもらう」「サツマイモのつるのリースを渡す」「堆肥で育てたさつまいもをぞうに届ける」などの活動で、子ども達は具体的に地域資源や地域の人材を身近に感じることができたのだと思う。ユネスコ園として自園ならではの地域交流を考え、年間の計画を作成したい。	B	B		・恵まれた地域環境や温かな地域の方々が身近にある喜びを味わえるよう、保育者自身が感動する気持ちを持ち、子どもと一緒に実体験を積んでいく。 ・ユネスコ園として自園のユネスコカレンダーを作成し、地域環境地域人材を活かした活動を進めていく。